HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ハマータウンの語り方 : ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』をめぐる社会修辞学の試み
著者	犬飼, 裕一; INUKAI, Yuichi
引用	北海学園大学学園論集(156): (1)-(17)
発行日	2013-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ハマータウンの語り方

ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』をめぐる社会修辞学[1]の試み

「しかしそれほど遠くへまで行けないことも事実である。距離だけが問題ではない。威嚇が山積みし、誰もが譲歩し、征服すべき地盤の一部を放棄する。限界を認めなかった想像力に、もはや窮屈な有用性の枠内でしか働くことを許さなくなる。想像力のほうは、この低級な役割をいつまでも引き受けることに耐えられず、二十歳頃には、おおむね、光明のない運命の手に人間を委ねる結果に落ち着く。」（アンドレ・ブルトン『超現実義宣言』（一九二四年）、生田耕作訳）

「人間が一人ひとり異なるからには、個人と個人のあいだだけでなく、個人が形成する集団間にも利害の対立がかならず生じる。」「敵意や敵対をなくすためのごく簡単な方法は、まず競争そのものを減らすということが考えられる。」（ディヴィッド・P・バラシュ『ゲーム理論の愉しみ方』、桃井緑美子訳）

犬飼裕一

1. 社会階層を語る[2]

「……教師はおれたちを処分できる。教師はおれたちよりもえらいんだ。やつらにはおれたちよりもでかい組織がひかえている。おれたちのはタカがしれてるけど、教師はでっかい制度を味方にもっているものな。それでも、言いなりになるってのはシャクじゃないか。なんていうかな、権威ずくってのはムカツクね。」

「まったくばかげてるよ。おれたちの子供なら言いたいことを言うさ。ペコペコするような情けないガキにはならないね。言いたいことを言って、シャンとしている人間になりゃいいじゃないか。」（ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』、三一―三二頁）

イギリスの社会学者ポール・ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』（熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫、一九九六年、原題：Learning to Labor；初版一九七七年）は、なによりも現場取材による生々しい言葉の迫力が魅力の本である。[3] 学校という閉鎖的な組織に見られる文化を、文化人類学的な参与観察（「生活誌」）の方法を用いて研究することは、当時斬新な業績であり、影響を受けた多くの研究が後に続くことになった。とりわけ、「カルチュラル・スタディーズ」と呼ばれる領域の先行業績の一つとされている。カルチュラルスタディーズは、従来の「文化」をめぐる研究が主に「高級文化 high culture」に偏ってきたのを批判し、従来「下位文化（副次文化、サ

ブ・カルチャー）sub-culture」[4]と呼ばれてきた領域を主題化することを掲げる。

ウィリスがこの本で扱うのは、イギリスの架空の工業都市の労働者階層が居住する地域「ハマータウン」（仮名）の高校に通学する「野郎ども」の文化である。「ハンマー（金槌）」は工場労働者のシンボルとして、昔はいろいろな場所で使用されたので、労働者による地域社会の名前として意味深い。もちろん、架空の都市といっても、実際には実地の調査を元にしており、調査対象となった個人を特定できないようにするための配慮による。ただし、この種の「配慮」が文献そのものの信憑性を損なうのは事実で、著者が恣意的な選択を行っていないと論証することは困難である。

ただし、本稿で問題にしたいのは、特定の社会調査について真偽を問うことでなくて、特定の形で表現された「文化」がどのような仕組みで成り立っているのかということである。言い換えれば、「文化」を語る流儀である。本稿では、『ハマータウンの野郎ども』を素材にして「文化」についての語りがどのような問題をはらんでおり、さらにどのような可能性をもっているのかを考察することにする。

洋の東西古今を問わず、十代の若者が通う教育機関には独自の組織文化がみられる。今日世界中に存在する「学校」というのは、すぐれて近代的な組織であり、それ以前の社会には見られなかった。ヨーロッパの修道院にせよ、日本の寺小屋にせよ、近代以前の教育機関は主に宗教に関係していたが、近代の「学校」は宗教から離れた国家事業として運営される。国家権力に批判的な研究者がしばしば論じてきたように、「学校」は近代国家が必要とする「国民」を大量に効率的に育成する機関として機能してきた。「国民」は強い経済の担い手（労働者、消費者）であり、軍事力の根幹（兵士）でもある。明治国家が掲げた「富国強兵」という言葉が言い表しているように、経済と軍事は近代国家の車の両輪として一体になって発展してきたからである。[5]

しかも、「学校」はそれを取り巻く一般社会とは異なって原理で成り立っている。マルクス以来の著者たちが強調してきたように、近代社会は強度に経済的な社会である。ところが、多くの「学校」は経済的な原理――金（カネ）――を排除することによって成り立っている。巨大な経済社会の中に浮かぶ非経済の孤島である。このことは、日本の「高校野球」のように学校教育の一環として行われている種々の競技会の優勝者に、多額の賞金を出すことを考えてみれば理解できる。あるいは大学入試のような種々の入学試験の選考基準に、密かに金銭が含まれることが明らかになった場合を考えてみればよい。それらは「金目当ての野球」であり、「金による裏口入学」として非難を受ける。しかも、非難はかなり感情的であり、絶対拒否といった反応を伴う。このことは種々の損害賠償が金銭によって解決されている社会情勢と鋭く対立する。職務上の契約違反、交通事故や離婚を「示談」で済ませる人々が、「学校」に金銭が介入することは拒否するわけである。

さらに、「学校」は通常の社会生活と別の価値基準を保持している。古典的な意味で近代の経済生活は、要するに、「モノを作ってそれを売ること」によって成り立っている。ところが、「学校」では可能な

限り軽視されている。一般社会にあっては、スポーツや音楽で生計を立てている人はごく限られた例外的存在であるが、「学校」では最重要の主人公である。このことは農業高校の生徒が農産品の品評会で表彰される場合と、野球の強豪校の「球児」が活躍する場合の注目度を比べてみれば一目瞭然だろう。仮に実業高校が生産した高品質の品物を高く売って、売り上げを生徒に配当する状況を想像するとよい。「学校」の生産物は諸費用を含んだ原価で販売されなければならない。利益を上げてはならない。「学校」では、「生産」や「営利」は排除されないとしても、できるだけ軽視される。一般社会において特殊なことが、「学校」では主役であり、「学校」で主流をなすことが、一般社会では例外に属する。この意味で「学校」というのは「平行世界（パラレル・ワールド）」としての性格をもつ。

そんな特殊な原理によって成り立っている「学校」世界の内部で、さらに特殊な原理で動いている集団が、「野郎ども the lads」である。『ハマータウンの野郎ども』の魅力は、「学校」という重層的な権力構造の内部に押し込められた人々の生の声を用いて、教育の現場で共有されている文化を描き出しているところにある。しかも、「学校」は多層的な組織であり、それぞれの層が相互関係の中で成り立っている。先の引用にあったように、「野郎ども」は上位の権力の介在を自覚している。生活全般について指導する教師たちの背後には学校があり、学校の上位にはもっと大きな組織があり、さらにたどっていくと国家権力に行き着く。腕力自慢の「野郎ども」でも、とても太刀打ちできないような強大な暴力が待ち構えているというわけである。

ただし、「権力」の問題にははるかに複雑な事情がからんでいる。権力というのは、とてつもない腕力を持った個人が一人で作り出したものでも、特別な最新兵器をたくさんもった集団が一方的に独占しているものでもなく、それに自発的に服従する無数の人々によって成り立っているからである。現に今日「先進国」とよばれる国に暮らす住民の大半は、警察官や軍人が街頭で兵器を使用しているのを目撃したことがない。日本国内に話を限定すれば、容疑者の反抗的な態度に逆上した警官がピストルを構えただけで大事件になってしまう。現に、大半の日本の警察官は実地での拳銃使用という経験をすることなく定年退職を迎える。ただし、目に見える「暴力」がないからといって、その社会に権力が存在しないのかといえば、そんなことはありえない。むしろ、警官や軍人が武器を使用する必要などありえないほどに住民が自発的に服従しているというのが現実なのである。

自発的な服従によって成り立つ権力は、必ず正当化を必要とする。正当化には多くの人々が納得する基準がなければならない。「学校」というのは、おそらく正当化のための基準を多くの人々に提供する役割を果たしている。さらにいえば、より多くの権力を持った社会階層と、そうではない社会階層に属する人々は、同一の基準で選抜されるわけではない。ところが、不思議なことに、常識で考えて不利な立場にある社会階層の成員は、少なくとも外見上、自ら選び取る形で加入していく。ただし、実際には「加入」という言葉は不適切で、親が属している階層が子供によって指向される。何らかの公的な強制力がなくても、多くの人々は社会階層を世襲する。それど

ころか公的機関は上方への垂直移動を推奨しているにもかかわらず、それを拒否して親の社会階層にとどまることを選び取るのである。

『ハマータウンの野郎ども』の主題はこの本の冒頭にある一文から明確である。すべての議論が、この一文から出発する。

「中産階級の子供たちは、総じて、その階級にふさわしい職業を獲得する。そのとき不可解なのは、他の階級の人びとがなぜそれを容認するのかということだ。一方、労働階級の子供たちは、総じて、労働階級の職務におもむいてゆく。この場合に不可解なのは、なぜみずから進んでそうするのかということである。」(一三頁)

The difficult thing to explain about how middle class kids get middle class jobs is why others let them. The difficult thing to explain about how working class kids get working class jobs is why they let themselves. (Willis, *Learning To Labor*, p.1)

社会における不平等の問題は、古くから終わることのない議論を生み出してきた。古典的なマルクス主義の経済決定論が一世を風靡し、後に相対化される。二十世紀の中頃あたりから力を持ってきたのは、「文化」を主題として問い直す議論である。人間社会の不平等は、もっている物的資源(動産・不動産)だけではなく、むしろ形のない文化にそこ基づいているのだというのが共通する考えである。上流階級、つまり親子代々有力者として生きてきた人々は、そうではない人々とは異なった生活習慣をもっており、生活全般をめぐる価値観や人生観すらも異なっている。もちろん中産階級も労働者階級もそれぞれに対応した文化を共有している。そして、それぞれの社会層に応じた文化こそが、人々を自発的に生まれ育った社会層に固定する役割を果たす。それはなぜなのか。まさにこれがこの本の主題なのである。

ここで重要なのは自発性の問題である。人々に自発的に特定の社会層に帰属させ、自分の社会層に忠誠心を抱かせる原因がどこにあるのか。そして、多くの人々の間にある不平等を固定化し、長らく維持していくのはなぜなのか。ウィリスが研究に当たって設定した仮説は、学校という組織を取り巻く社会的関係が学校内部の文化に与えている影響である。簡単にいえば、中産階級の子供は中産階級の文化を、労働者の子供は労働者の文化を引き継いでいるのだということである。そのためには広大な社会全般を巻き込んだ大きな仕組みが想像される。

「それ以外に選択の余地はないからだ、と、たんにそういって片づくほど事態は単純ではない。産業活動に必要な手の労働力 manual labour を調達する方法は、社会が異なるにつれて異なっている。一方の極に機関銃をつきつけて輸送用のトラックに駆り立てる方式が、もう一方の極に自発的な勤労奉仕軍をイデオロギー的に形成する方式が、それぞれに位置するとすれば、私たちの自由な民主主義社会のやり方はこの中間のどこかにある。つまり、露骨な物理的強制力は用いないで、一定程度の自発性に依拠するような方式である。それも、手の労働が、その報酬において劣り、その社会的評価において低く、その内実において無意味さをましている、ひとことでいって、階級社会の下半分に位置づけられている、その現実にもかかわらず、である。私たちの社会のこの驚くべき機構の一端を解き明かすこと、それが以下の論述の中心課題である。」(一三―一四頁)

ウィリスが自覚しているように、問題は単純な力関係で成り立っているわけではない。憎々しい表情の「権力」が機関銃とトラック

で人々を追い立てるなどという論理が、一九七〇年代のイギリス社会に通用するはずはない。他方で、無数の人々をまんまと欺す巧妙な宣伝（プロパガンダ）が行われていて、それが長年続いているわけでもない。この著者が主張したいのは、両極を結ぶ数直線のどこかに存在する「驚くべき機構」である。

それでは肝心の「驚くべき機構」というのは何なのか。まさにこれがこの本の急所というべきところである。

2．二つの戦略と運命

社会的に不利であるはずの社会階層を若者が自発的に選び取るように仕向けているのは何なのか。逆に言えば、誰もが有利な立場を求めて競争するはずなのが、なぜか競争が起こらず、むしろ多くの人々が親しく知っている階層文化に追随していく理由は何なのか。自分から不利な運命に従っていくのはなぜなのか。自発的に不利になってしまう文化は、どうやって多くの人々に共有されるようになっているのか。あるいは何か競争や利害対立を避ける機構が社会に組み込まれているのか。

ただし、これらの疑問は一つの前提に収束する。前提とは、人間は自分自身の利益を極大化するために合理的に行動しなければならないという考えである。別の言い方をすれば、この種の立場は、特定個人が、自分の利益を極大にするために最小限の努力で最大限の成果を上げることを「合理的」と呼んでいる。[6] ウィリスがここで想定している合理性というのは、多くの若者（高校生）がより有利な社会的地位、とりわけ収入の点で有利な仕事（jobs）につくことである。もちろん、この種の判断自体が、一種の経済決定論（あらゆる問題を貨幣に還元しようとする考え方）であることは事実である。先の引用にあるように、当時のイギリス社会について、「労働者階級の職業（working class jobs）」というのは、「中産階級の職業（middle class jobs）」に比べて賃金が低いと強調している（一三頁）。するとこの著者が考える「驚くべき機構」というのは、経済的な格差を巧妙に見えなくする仕組みであると考えることができる。

他方で、ウィリスの理解では、学校という場で生活する労働社会層出身の生徒には二つの選択肢がある。一つは、学校の秩序に順応することで地位向上を図ろうとする戦略をとることである。そしてもう一つが、学校を成り立たせている秩序そのものを容認しない戦略である。具体的にいえば、この著者が「耳穴っ子 ear'oles」と「野郎ども the lads」の対比で描き出しているものである。「耳穴っ子」というのは、教師のいうことをよくきく生徒で、従順な態度で担当教員による調査書の内容を良くしたり、あるいは有利な勤め口への口利きを期待したりする。対する「野郎ども」は、その種の戦略が有効ではないことを見抜いているか、あるいは自分たちとは異なった社会階層に属する学校教師に服従することをよしとしない。「耳穴っ子」は「野郎ども」が学校の秩序を乱すことを非難し、「野郎ども」は、教師に告げ口する「耳穴っ子」の権威に従順な態度を軽蔑する。

ウィリスの理解では、実は両方ともそれほど成果を上げることはできない。学校に従順な生徒は職業市場において、より「中産階級」に近い仕事を望むが、それは難しい。その種の職種では、すでに中

産階級出身の若者がポストを得ているからである。有利な条件は他人に取られてしまっており、条件の悪い事務仕事を転々とすることになりやすい。結果、中産階級への指向と、そうではない現実の間で苦しむことになる。これに対して、「野郎ども」は、労働者の職場や仕事に好都合で、受け入れる職場の側も、むしろこの種の生徒を求めている。労働者の職場には親が働いており、家庭や地域でなじんだ文化と切れ目なくつながっている。そして、「野郎ども」は個人的なネットワークを通じて、いくつもの職場を異動しながら労働者としての人生を送っていく。蛙の子は蛙というわけで、親の社会階層をそのまま子供が受け継ぐのである。

ただし、問題はそれほど単純ではない。人間は誰でも今そうである状況よりもいくらかでも向上できるならばそれを望むにちがいないからである。ところが、多くの人々はかなり早くの段階で自分からその望みを捨ててしまうように見える。この問題について、ウィリスは経済的な格差が文化的な次元で当事者たちに別様に見えている様子に注目する。とりわけ興味をそそるのは、学校や教育がかかえている独特の原理と経済的な格差や階層文化の相互関係である。ここでいう独特の原理とは、「フォーマルなもの」である。

「私たちがこれまで見てきた対立は、多くの点で、フォーマルなものとインフォーマルなものとの対立の典型的な事例として理解することができる。学校はすぐれてフォーマルなもので成り立つ世界だ。学校には画然とした構造がある。独特な建築様式があり、校内規則があり、教育上の慣行がある。教職員のあいだには位階制度があり、その権限は――ささいな事件を通してではあれ、私たちがすでに見たように――行きつくところは国家によって、威厳をつくした法律によって、国家に属する抑圧装置としての警察によって、正統性を保証されている。〈耳穴っ子〉はこのフォーマルな構造に身をゆだねている。そして、みずからの自律性を放棄してその分だけ、この構造の権限ある番人たちに、神聖な規則を行きわたらせるよう期待する。それは往々にして教職員の現実の職責をはるかに越える要求となる。つまり、誠実をつくす生徒たちがみずからの意志で禁欲したものは、不誠実な生徒にも許されてはならないというわけだ。」（六〇―六一頁）

「学校はフォーマルなもので成り立つ」というよりも、むしろ近代国家が国民にたいして「フォーマルなもの」を根づかせるために維持してきた制度こそが「学校」なのだという方が正確なのかもしれない。それは一貫して単純な「建前（タテマエ）」の世界であり、現実にはいろいろある複雑な社会関係をあえて見えないことにすることによって秩序づけられている。

たとえば、人間の能力や家庭環境、親の財力や地位には明らかに格差があるが、格差があたかも存在しないかのように生徒を扱うのが世界中の多くの学校であり、教師である。先に述べたように学校というのは、「平行世界（パラレルワールド）」なのである。しかも、「教育」をめぐる議論の多くはこの「フォーマルなもの」をいかに維持強化していくかについて費やされている。このことは若干の違反事例を考えてみればすぐに理解できる。個人的な経験を記すことを許していただくと、通っていた私立高校の同級生にとある大企業の社長の子息がいた。この大企業は高校とも深い関係があった。校長をはじめとして一般教員もことあるごとに、当人と、「お父上はお元気ですか」「はいおかげさまで……」というような会話を毎度飽きる

ことなく繰り返す。一介の生徒として非常に違和感を感じたことを今でも強烈に記憶している。ただし、それは学校という世界に完全に同化していた過去の時点での判断であって、本稿の筆者の今現在の判断ではない。むしろ、校長も教員も広いとはいえない特定の町の民間職業社会の一員であって、関連業界の有力者の子弟と良好な関係を作りたいと思うのは当然のことである。今の自分でも同じことをする可能性が高い。むしろ、いわゆる「一般社会」の常識からして、「学校」の原理の方がかなり特殊であると考えるべきである。

言い換えれば、学校というのはこの「フォーマルなもの」を基礎にして成り立っている相互行為の総称ととらえることもできるだろう。相互行為の中でもっとも理解しやすいと思われているものの一つが、上下の権限の非対称性による「権力」関係である。一方には巨大な宮殿や強固な軍隊に象徴される権力者がおり、他方には無力な労働者、大衆。強者と弱者。現に『ハマータウンの野郎ども』の議論も、学校と権力をめぐるかなり古風な議論に多くの頁をさいている。[7] この本が一九七〇年代に出ていることは、念頭に置かなければならない。

むしろ、ここで重要なことは、この著者が古くからの権力論に立ちながらも、議論の力点を「文化」の問題に移そうとしていることである。[8] まさにこの点こそが、『ハマータウンの野郎ども』を社会学の成果として成り立たせているからである。もちろん、それこそが「国家に属する抑圧装置としての警察」や「権限ある番人」といった昔ながらの決まり文句の合間に、しばしば登場する冴えた切り口の魅力でもある。

「ある制度が〈野郎ども〉の一員であるということの要点は、彼が集団とともにあるということだ。たったひとりでなにがしかの文化をかたちづくることはできない。たったひとりで楽しみや独特の雰囲気や社会的なアイデンティティを生み出すことはできない。反学校の文化に与するとは、集団に所属することであり、その文化を生きるとは、集団とともに行動することなのである。」（六二―六三頁）

この著者が文化人類学の「エスノグラフィー」の方法から学んだ最良の視点がまさにこれである。人間のあらゆる文化は他者と共有するものであり、共有されなければ無意味である。たとえば教祖一人だけの宗教は、内容によっては宗教学にとって有意義でありえても、文化人類学や社会学にとっては無意味である。むしろ、文化の面白いところは、多様な外見とは裏腹に実際にはどれも似通っており、しばしば少数の類型にあてはめることができることである。現に、反学校文化というのも、日本中、それどころか世界中、あきれるほど同じようなもので、本人たちが請け合うほど反抗的でも独自でもない。さらにいえば、国境や年代を越えて多数の人々に共有されているからこそ文化として成り立っているともいえる。

むしろ、重要なことは「フォーマルな文化」としての学校文化が世界中かなり共通のものとして構成されており、それに対抗する「反学校文化」も共通の性質をもつことである。学校ごとの違いはあるにせよ、おおよそどこにでも反学校文化は存在し、それぞれよく似たことをやっている。学校の教師にはどこでも似通った職務態度があり、どこにでもよく似た優等生がおり、またどこにでも要領のよくない「耳穴っ子」や跳ねっ返りの「野郎ども」がいる。どこでも同じようなスポーツに汗を流す、同じような表情の生徒が活躍して

おり、入学試験に血眼になる受験生も世代を追ってよく似ている。しかも、当事者だけではなくて、「学校」や「教育」について語る人々の態度まで似通ったものになっている。

ではなぜなのか。このように問う時、「学校」をめぐるいろいろな文化がどのように成り立っているのかを考える糸口が見えてくる。

3．学校と教育を語る言説世界

「荒れる学校」「校内暴力」「いじめ」「学級崩壊」、あるいは種々の「ハラスメント」など、教育をめぐる議論にはいつも印象的な言葉が使われてきた。印象的な言葉には危険も伴っていて、言葉で仕事をする研究者やライター、ジャーナリストといった人々は、しばしば特定の型の言葉（修辞）に特定の思考をするように仕向けられる。[9] 二十世紀のいろいろな分野の議論が明らかにしたように、人間は言語を使って思考しているつもりでいながら、実は言語に思考させられているからである。

たとえば、自分の身の回りにある特定の不快な人間関係に日々悩んでいる人物が、「いじめ」という言葉を知ることで一気に状況を理解した気になる。あの行為も、あの事件も、「いじめ」だったのだ、そうだあの不快な上司、気に入らない同級生、教員は、「いじめ」をしていたのだという形で理解する。ただし、「理解する」というのは当人の意識であって、「理解させられている」というのが正確である場合も多い。たとえば、「いじめ」という言葉はしばしば拡大解釈され、場合によっては、自分にとって不快な人間関係はほとんど「いじめ」であるという判断をする人物も登場する。要するに、嫌いな奴は「いじめ」をやっているということになってしまう。もちろん、子供が喧嘩をすれば「校内暴力」や「荒れる学校」が想起され、生徒の私語が止まらないと「学級崩壊」と呼びたくなる。言葉はいつしか一人歩きし、通常なら見えないはずのものを見せてくれるようになる。

このように考えてくると、より多くの「言葉」を知っている人々は、世の中の多くの人々よりも、より多く、見えないはずのものを見せられているともいえる。しかも、そのことによって当人は大きな優越感を感じる一方で、無知な人々を啓蒙しようとすることもある。こうして世にいう「イデオロギー」が成立する。

本稿で検討してきた『ハマータウンの野郎ども』もまた例外ではない。ここで引用してきた短文だけでも、「権力」をめぐって、「機関銃をつきつけて輸送用のトラックに駆り立てる」や「自発的な勤労奉仕軍をイデオロギー的に形成する」、「国家に属する抑圧装置としての警察」「権限ある番人」といった言葉が登場している。次第に、これらの言葉を使って思考しているのか、それとも、単にこれらの言葉が敷いたレールの上を走っているだけなのかわからなくなってくる。

> 「正常な運行を攪乱しかねない逆流や伏流を処理し、秩序の基本を維持しようとする緊張した精神状態、まさにこのために学校は、拘禁された青春のやり場のない閉所恐怖感で満たされる。つまるところ一切は、公正な交換とその前提条件をなす秩序の維持を主軸にして回転するのだ。この意味で学校は一種の全体主義の政体である。なるほどむき出しの強制や抑圧はそれほどでもない。かわりに精神活動の自在な展開を強引に型にはめる力が働いている。すべては小

ぎれいに整頓されており、あらゆる物語には千篇一律の終幕が用意され、想像力は等しく変わりばえのしないアナロジーに帰着することを求められる。」（一六八―一六九頁）

「全体主義」と「精神活動の自由な展開」、そして「アナロジー」。フランクフルト学派――ベンヤミン、あるいはアドルノ――を思わせるような言葉の連なりは、一見荘重な印象を与える。しかし、平易に言い換えれば、要するに学校はむき出しの暴力の代わりに管理や不安で生徒を型にはめているというおなじみの語り口である。現にこの種の説明には、「言説」と呼ぶべきものが多く含まれている。言説、すなわち特定の型の言い方が貨幣のように流通している様子は、もちろんそれ自体が興味深い現象である。先に特定の言説があって、人はそれに好都合な事実を見つけ出して議論を組み立てていく。現に、「精神活動の自由な展開を強引に型にはめる力」について語る人物も、やはり型にはまったことをいっている。もちろん、それはこの著者に限ることではない。「権力」や「教育」をめぐる議論の多くを時間をおいて冷静に観察するならば、特定の言説が人々の思考に枠組みを与えていることがわかってくる。いかにも「……風の物言い」というのは、逆に言えば特定の言説や語りの様式を踏襲しているということでもある。

それでは、この種の語りの構造を生み出しているのはいったい何なのだろうか。おそらくそれは「権力」や「教育」の問題、つまり社会の問題について論じる人々が相互的に生み出してきた文化に関係している。話が複雑になってしまうが、文化について論じることと自体が文化だからである。ウィリス自身が書いているように、「たったひとりでなにがしかの文化をかたちづくることはできない」からである。当然「権力」や「教育」を論じる人々も特定の「集団に所属」しており、「その文化を生きるとは、集団とともに行動することなのである」。

ここで注目したいのは、「権力」や「教育」の問題を、自分自身から切り離して論じようとする文化である。この文化に関連して「客観性」という言葉がある。「客観」は「主観」と対語で使われ、対象とは関係のない第三者の立場で論じていることをいう。その上、「客観的」というのは、かなり無条件に肯定されてきた立場である。「主観的な議論」というのが忌避されるならば、代わりに推奨されるのが「客観的な議論」であろう。そして、この「客観的」というのも、この言葉が登場した瞬間に思考が停止する魔力をもっている。魔力は強力で、かなりの説明をしないと解除できない。

たとえば、あたかも自分はそこにいないかのように社会について語るというのはどういうことなのかと問うてみる。自分もまた社会生活を送っている人間が、人間の社会一般について「客観的」に語るというのはどういうことなのか。非常に広汎な「国際政治」や「国民経済」について論じるのならば、あるいは可能なのかもしれない。これに対して、かなり限定された場で起こっている社会現象を、どうやって「客観的」に論じることができるのか。

「しかしながら、社会のある特定の部位に縛られた人びとが階級の文化を受け入れ、生かし、環流させる過程は、当事者たちにとってはかならずしも階級次元の文化形成過程として認識されているわけではない。同じように、基本的な社会構造上の不平等が、体制の秩

序と同化した社会常識の体系を媒介にしてはじめて安定した支配関係として維持されうる事情、人びとが社会のそれぞれの部位に縛り付けられて相互に切り離され相互に対立させられている事情、これらのこともあるがままに認識されているわけではない。それはなぜか。社会を構成する各部署は、それぞれ独自に制度化された固有の関係でうち固められており、そのうえで一定の自治能力を分与されているために、相互に隔てられていると同時に社会システム全体からも隔てられているからである。制度として切り離された社会的部位は、それに固有の行動様式と思考様式をもつ。それぞれがみずからを合法化する固有の教理をもつだけではなくて、その転倒を企てるインフォーマルな動きもまたその部位に固有の現われかたを余儀なくされるのである。」(一五一―一五二頁)

毎度この種の議論を目にするたびに腑に落ちないのは、著者がもっている超能力である。当事者に「あるがままに認識されているわけではない」過程が、どうして著者にだけ認識できるのか。その根拠はどこにあるのか。

しかも、『ハマータウンの野郎ども』の場合、著者は現場で当事者にインタヴューしており、しかも彼らの立場に同情しているかのような書き方をする。ところが、同情しているような口ぶりでも、なぜか同時に気の毒な人々の陥っている無知や偏見については突き放した調子で非難する。自分の生活を向上させようともがき苦しむ人々が、実際には長年の間に身につけてきた悪しき習慣によって、残念ながら自滅する。まるで自分を不利にすることを自分から希望し、しかも必死にこだわっているような人々である。そんな不幸な運命を予知しているのは、著者ウィリスだけなのである。根拠がどこにあるのか不明だが、あたかも著者だけには常人にはわからない社会の真理、あるいは「客観的」な状況がわかっているかのようである。

ここに古くからの社会科学が秘かに用いてきた巧妙な仕組(レトリック)みがある。それは論者の視点を巧妙に使い分けながら自分が意図する結論につなげていく仕組みである。たとえていえば、小説の作者が、時に主人公の立場に寄り添い、また別のところでは万能神の視点に立って主人公の運命に冷酷な審判を下すようなものである。それは「社会」について書くという行為が古くから抱えてきた問題でもある。自分もまた社会の一員である著者が、あたかも自分は無関係な人間であるかのように語ることによって、「客観性」を主張する。同時に、みずからの責任を免れようとする。しかし、実際には著者もまた「社会」を一緒に作り出しており、特定の型の言説[10]を繰り返すことによって、直接、間接に特定の形の社会を再生産しているのである。

あたりまえのことといえばそれだけのことなのだが、なぜか「社会」について語る人々の多くは、この種の仕組(レトリック)みについて気づかないふりをしているように見える。そして、この種の演技が多くの問題を見えなくしている。たとえば、多くの人々は、自分自身の社会生活にあって、「個人」であろうと願う。個人である自分は自立しており、自らを取り巻く多くの障害に打ち勝って自己実現しようとする。何ものにも依存しない存在として、究極の自由を志向する。しかし、実際には無数のしがらみの中で互いに妥協し合いながら生きて行くほかはない。ここに理想と現実の間の亀裂が生じる。亀裂は深刻で、ほとんどの人々は解消することはできない。むしろ、この

種の亀裂そのものが人間にとって不自然な約束事のせいで成り立っているのではないのか。ところが、「客観性」を掲げる長年の演技が、亀裂をあたかも存在しないかのように思わせてきたのではないか。

あるいは、不自然な約束事を墨守しようとする努力こそが多くの人々に負担を与えているのではないだろうか。

4．権力とハンマー

名作『ハマータウンの野郎ども』を読んでいく中で何度も経験するのは、「現場（フィールド）」で思索する著者が、いろいろ手を尽くして自分の語り方を守り通していこうとする熱い息づかいである。最も印象的なのは、教育現場に登場する「野郎ども」とその親たちが共有する労働者の文化に直面する場面である。

「学校の授業をさげすむ〈野郎ども〉は、なにかにつけて、自分たちのほうがものごとをよく知っていると感じている。同じように職場の人びとは、そして一般に労働階級は、理論よりも実践だ、という根深い感情をもっている。ある職場には労働者が手書きした格言が貼り付けてあって、それはマッチ箱によく書いてある宣伝文句を借用しているのだが、「一オンスの敏捷さは無数の成績証明書に匹敵する」と言い切る。およそ机上の知識のばからしさを嘲笑するたぐいの寓話は、職場にはごろごろ転がっている。実践的な行動力こそが第一に大切なので、いろいろな知識はそのうえでのことなのである。中産階級の文化のなかでは、教養や資格は現実の生産行為に代わる個人的な出世の道具とみなされるが、労働階級の目からみれば、およそ知識なるものは具体的な生産労働に固く結びついているべきものなのだ。その実践の場でもちこたえられないような知識は排除される。……」（一四三頁）

大事なのは机上の理論よりも現場の経験だ、というわけで、正直な感想を言えば、「一理ある」と、本稿の筆者は考えている。生き生きとした会話文が続き、大勢の登場人物たちが自分たちの信じるところを飽きることなく強調する部分は、かなり説得的ですらある。現場の当事者にはわからない「真実」を、何らかの特別な知的能力で自分（たち）だけは理解していると称する人々の議論を見飽きた目からすると、むしろ心地よいくらいである。そもそも、人間は自分が日々暮らす現場で、他者と関係し合うことで自己実現しているのではないだろうか。無限に複雑な存在である人間が、無限に複雑に関係し合うことで日々刻々生じている「社会」を、第一に知っているのは現場の人々である。無数の経験知の中から汎用性がある知識を抽出して「技術」あるいは「マニュアル」、さらには「理論」としてまとめることは無意味ではないが、現場の経験知を超えるものではない。ところが、この著者は同意しない。

この魅力的な著作を読んできてひどく当惑させられるのは、著者ウィリスが、ここで登場する労働者の親子とは正反対の価値観を抱いていることである。簡単にいえば、重要なのは抽象的な理論であって、現場の経験は価値が低いと考えている。たとえば、「一オンスの敏捷さは無数の成績証明書に匹敵する」というのは、当人たちの目に見えない広大な権力関係が押しつけた虚構であり、成績証明書を得ないで学校を出た人間を、現状に押しとどめる呪文のようなものにすぎない。理想は学校教育を十全に受けた上での社会的栄達ということなのだろうか。いわゆる「知識人」らしい価値観である。[11]

「ハマータウン」を語る知識人は、おそらくイギリス国内にある「ハンマーの町（タウン）」が体制に取り込まれ、飼い慣らされていく様子を残念

に思っていたのだろう。時は流れ、「権力」と「ハンマー」の対立よりも、「権力」や「ハンマー」からなる言説の仕組みに関心が移ってからは、その種の言説を生産する人々――知識人――が、いったいどこにいるのかという問いが重要になってくる。それは、知識社会学の問題である。知識社会学は言説の世界を観察し、そこで活躍する人々がいったいどのような立場から発言しているのかを考える。すると、あたかも自分は関係がなく、はるか彼方に離れて「客観的」に語っているかのようにふるまう人々が視野に入っていくる。自分たちとは関係のない人々が置かれているかわいそうな運命に勝手に同情して、ひどく抽象的で正体不明の「権力」や「社会悪」をののしる。この種の人々は、自分たちだけは特別席にいて「社会」という名の闘技場（アレーナ）で剣闘士が戦っている様子を眺めているかのようである。

結局のところ、「知識人」を頂点とする価値観だけで「労働者」を評価するだけならば、結論としてたいしたことをいっていることにはならない。勉強した知識人は、落第した労働者よりも偉いと主張しているだけだからである。そして、結局のところ『ハマータウンの野郎ども』が繰り返し非難してきた巨大な権力構造の維持再生産に、著者自身が荷担しているのではないのかという、意地悪な疑問に突き当たってしまう。つまり、自分が非難している権力の構造を、自らも荷担して再生産してしまう構造である。

言説と言説による語りは、社会的相互行為の中で再生産されていく。「権力」をめぐる議論が権力を再生産する。権力について型どおりに非難すればするほど、多くの人々を恐れさせる。もちろん、「教育」も同様である。受験競争はけしからんという言説が、自分の子供だけは有利に地位に就かせたいと願う無数の親の意図の結果、むしろ受験競争を激化させる。この意味で言説を操ることは、社会についての分析であるのと同時に、それ自体が社会的行為でもある。もちろん、「言説と言説による語りは、社会的相互行為の中で再生産されていく」という命題も、それが行き渡るならば、やはり言説として再生産される可能性がある。

さらにいえば、何らかの社会問題について語るということ自体が、循環構造に基づいている。このことは「自由」や「民主主義」といった言葉について考えてみればよくわかる。「自由」について語ると、語られた「自由」からの自由が問題になってしまう。これこそが「民主主義」だと主張する議論が本当に民主的に成り立っているかどうかは場合による。もちろん、「自由」や「民主主義」を長年論じてきた社会科学も例外ではない。ただし、学問を構成する言説が自己産出する過程は、そのこと自体をもって非難するには当たらない。むしろ人間は循環する論理で知を組み立てていく生き物だからである。

問題はこうして「ハンマーの町」から「知識人」たちが住む町の方に移行する。特定の文化のせいで社会の真実を見失っている人々を、遠く離れたところから観察する人々が暮らす町である。社会の相互行為から外れた特権的な場所にいて、自分たちだけの内部で相互行為している人々が生み出す「平行世界（パラレル・ワールド）」。

それはなぜか「学校」に似ている。学校の先生が生徒を観察するように、知識人は「ハンマーの町」を一方的に観察し、正しい生活に修正しようとする。まさに二十世紀に世界中で登場した平行世界である。『ハマータウンの野郎ども』は、そんな二十世紀を追体験させてくれる名作なのである。

（二〇一三年三月十四十四日）

1　本稿は二〇一二年度北海学園大学経済学部犬飼ゼミナールでの討論を下敷きにしている。ここで取り上げたのは、ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』（熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫一九九六年）である。Paul Willis, *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, 1977 (Columbia University Press 1981.

2　「社会」について語る。社会科学には一つの宿命がある。それは言葉によって表現しなければならず、しかも言語表現が決定的に重要であるという、ごく自明の事情に基づいている。しかも言語は真空の世界に浮かんでいるわけではなくて、むしろ過去からの用例に全面的につながっている。そして特定の型の語り方（レトリック、修辞）が広く受け入れられると、今度は語り方そのものが人々の思考を枠にはめてしまう。型にはまった言い方、決まり文句、そして「言説」。これらの概念は、しばしば非難の意味を込めて用いられている。まさに「型にはまった言い方」という言い方自体が型にはまっているからである。

そんな語りの様式を研究するにはどうしたらよいのだろうか。社会をめぐる語りの様式を研究する社会修辞学という研究視角を考えるならば、多種多様な語りを互いに比較することが可能になるのではないだろうか。本稿で意図しているのは、「社会問題」を論じた文献にみられる特定の型のレトリックを取り出して、それが読者をどのように導いているのかを考察することにある。

「社会修辞学」という言葉は、筆者の知る限りでは、日本語の用法としては普及していないようである。ただし、英語圏に目を転じると、「社会修辞批評Socio-Rhetoric criticism」という言葉が使われている。この言葉は、アメリカの聖書学者Vernon K. Robbins（一九三九―）が創唱したもので、テキストの社会的背景を踏まえながら教育の手段としての「修辞法」を研究することを意図している。具体的には新約聖書のなかで、「教育者としてのキリスト」が弟子たちにどのような修辞法を用いていたのかを社会的視点から読み解いていくものである（Vernon K. Robbins, *Jesus the Teacher: Socio-rhetorical Interpretation of Mark*, Augsburg Fortress Publishing, 1984）。ただし、本稿の研究視角との直接の関連性はないことを付言しておきたい。

3　著者ウィリスがとっている方法は、「統計的な定量分析ではなく、被調査集団に参入して行う定性的な記述方法、つまり、文化人類学的な生活誌の方法」である（二〇頁）。未開社会（主に文字がない社会）と呼ばれる社会を論じてきた文化人類学の方法を現代の社会に応用して研究することは、「社会人類学」の故郷であるイギリスで長年行われてきた。むしろイギリスの伝統にあっては、社会学よりも「社会人類学」の方が主流であったといえる。

4　「サブ・カルチャー」という言葉は、日本語による社会学研究にとって特殊な状況におかれていることを注意しなければならない。アメリカの社会学者ディヴィッド・リースマンが創唱したこの概念は、元来は、特定の集団に共有される独自の文化を指している。当然各々の文化は入れ子構造になる。たとえば、「歌舞伎」は「日本文化」のサブ・カルチャーであり、日本各地に伝わる「農村歌舞伎」は「歌舞伎」のサブ・カルチャーである。ところが、日本で今日この言葉を使う場合、大半は、いわゆる「オタク文化」を指している。アイドルやアニメ、漫画、特撮といった分野は、長い間、学校教育と合体した「文化」（高級文化、high culture）に対抗するものとして、「対抗文化（カウンター・カルチャー、counterculture）」の役割を果たしてきた。ただし、カウンター・カルチャーという語が、しばしば主流の文化に対する意図的な挑戦や攻撃を意味していたのに対し、日本の「サブ・カルチャー」は、主流の文化に対する無関心を表明するものとして存在してきた。社会的な関心が希薄な、まさに「オタク」である。

しかし、一層興味をそそるのは、日本の「サブ・カルチャー」が世界的な名声を獲得するようになったことである。明治以来、とりわけ知識人は、西洋の文化を導入することこそが「文化」であると信じてきた。ところが、正統な「文化」を担う人々による成果よりも、「オタク文化」の方が今日、世界的には高く評価されている。外国の議論を輸入することに専心する「識者」の成果よりも、怪しげな同人誌から出てきた「サブ・カルチャー」の方が世界に影響を与えている。このような社会通念と国際的な評価の食い違いこそが、今日の日本社会の「文化」にとって大きな問題なのである。

さらにいうならば、日本の「サブ・カルチャー」こそが、たとえば一九六〇年代の「対抗文化（カウンター・カルチャー）」に匹敵する世界的文化現象として問い直されるべき位置にあるのかもしれない。そこには「文化」をめぐる豊かな可能性が無数に秘められているはずである。

5　ウィリスはこの本の中で次のように書いている。

「私たちがこれまで見てきた対立は、多くの点で、フォーマルなものとインフォーマルなものとの対立の典型的な事例として理解することができる。学校はすぐれてフォーマルなもので成り立つ世界だ。学校には画然とした構造がある。独特な建築様式があり、校内規則があり、教育上の慣行がある。教職員のあいだには位階制度があり、その権限は――ささいな事件を通してではあれ、私たちがすでに見たように――行きつくところは国家によって、威厳をつくした法律によって、国家に属する抑圧装置としての警察によって、正統性を保証されている。」（六〇―六一頁）

6　しかし、ここに一つ決定的に困難な問題がある。それは、肝心の「最大限の成果」を測る基準が明確に定まっていないということである。「合理性」、あるいは「合理的選択」を掲げる立場が最大の成功を収めてきたのは、経済学である。理由は簡単で、経済学は貨幣という数量化が容易な――より正確には、数量そのものを本質とする――基準が存在する。個人Aと個人Bがいたとして、特定の行為を行った結果、より多くの貨幣を獲得した方を「合理的」と呼ぶならば、論理は一貫する。証券会社が高校生向けに昔からやっている投資コンテストが典型である。

これに対して、社会学や人類学では貨幣のような基準が存在しない。むしろ、経済学に対する差異化として、貨幣を用いないことを選んでいる社会学は、貨幣で計測されない、数値化困難な問題を意図的に選ぶことで成り立っている部分がある。逆に言えば、あらゆる社会問題を貨幣による数値化で計測してしまったら、それは経済学であって、社会学ではなくなってしまうのである。

すると、社会学にあって、「合理性」の基準として統一的に妥当し、しかも数値化できる基準というのはあるのだろうか。残念なことに、それほど多くはない。特定の都市の人口の推移や市域の面積の時間経過による増減、選挙における投票行動の動き、あるいは教育にともなう成績や進学者の数値化などが思いつく。もちろん、それらが重要な指標として使われているのは事実だが、それらが社会全般において貨幣に代わる数値化として役割を果たしうるとは思われない。むしろ、次々と登場してくる数値化不可能な基準こそが多様な社会学の性質をそれぞれ決定している。

もっと正確に言うならば、社会学者は数字で語りうることよりもはるかにたくさんのことを語る人々である。もちろんこのことは「教育」をめぐる社会学にあっても同じである。仮に教育にあって数値がすべてであるならば、それは教育行政や教育産業（学校経営や受験産業）の課題であって、社会学の課題ではない。現に教育社会学という分野の議論は、おおむね教育における数値化に対する批判が主流である。日本社会についていえば、「偏差値教育」をめぐる教育社会学の議論を少し観察してみるだけで十分だろう。

7　まさにこの点にこそ、マルクス主義型の「カルチュラル・スタディーズ」の立ち位置が典型的に出ている。この意味でこの『ハマータウンの野郎ども』は確かに「古典」としての地位にふさわしいものである。まず、一方に「フォーマルな世界」を徹底的に他者として、またしばしば悪者として描く。行き着く先は、マルクスのいう「権力」であり、物理的暴力を独占する「警察」や「軍隊」である。それらは階級格差

を固定化し、労働者階級による異議申し立てを上から押さえつける役目を果たす。

この場合、注意深く観察するべきなのは、著者が修辞的な偽悪趣味を常用することである。まるで自分が「悪者」（アウトロー、インフォーマル）の立場に立って「権力」を睨みつけているかのように書くことである。次に、「フォーマルな世界」に対面する「弱者」を二種類に描き出す。一つは、権力への（不器用な）追随者であり、もう一つは、（不器用な）反逆者である。追随者は権力が捏造するイデオロギーを盲信する代わりに権力からの見返りを期待する人々であり、反逆者はイデオロギーの虚構を見破っており、権力による強制の盲点を突いてしばしの快感を得る。ただし、追随者も反逆者も究極的に成功することはできない。追随者が権力にすがることで得られる対価はほんの少しであり、投資に見合わない。他方、反逆者も行き着く先は権力が前もって用意している罠であって、こちらも権力の手のひらの上で踊っているにすぎない。両方とも、結局「究極の成功」は得られないというのが毎度の結論である。以上を要点としてまとめてしまえば、いろいろな説明はあるにせよ、結局のところ、権力と「弱者」の二項対立である。

ただし、私がここで是非とも問いたいのは、この種の二項対立を毎度毎度提示する論者自身がいったいどこにいるのか？ということである。つまり、権力に対面する弱者たちにはまったく見えない「権力」（フォーマルな世界）の仕組みが、なぜマルクス主義者だけには手に取るようにありありと見えるのか。さらにいえば、この種の論者たちは自分自身が「権力」と完全に無縁であるという保証がなぜできるのか。それは、もちろん単にこの本の著者の問題だけではなくて、長年にわたってあたかも社会を上空数千メートルから観察するかのように「客観的」に「社会問題」を論じてきた社会科学そのものの問題である。

8　ウィリスが「文化」の問題について次のように書いているのは意味深い。

「……なぜといって、およそ文化というものは、社会化の議論が言うように、単純に外的世界が人格に内面化された体系などではないし、また、ある種のマルクス主義が主張するように、支配的なイデオロギーを受動的に押しつけられた結果であると片づけることもできない。文化はそれらであると同時に、少なくとも部分的には、集団的な人間主体の実践的な行為から生み出されるものなのである。」（二〇頁）

ウィリスの立場は、「文化」がまさに人々の相互関係の中で、まさに編み出される現場に注意を払うところにある。

9　関連の問題を、「メディア知識人」について、別稿で議論したので併せて参照されたい。拙稿「清水幾太郎　忘れられた人気者の社会学　竹内洋『メディアと知識人　清水幾太郎の覇権と忘却』（中央公論新社二〇一二年）を手がかりに」、『北海学園大学学園論集』、第一五五号、二〇一三年三月。

10　言説の作用、つまり「語ること」が人間の思考を型にはめていく過程は、『ハマータウンの野郎ども』の場合、たとえば「権力」について観察するとよりわかりやすい。

「学校という社会の組織的な営みは、それはそれで教師―生徒の一定の関係を補強する。時間割は規則正しいベルの響きで統率されている。職員室に入るときには敬意を表する儀礼的な手続きを踏まねばならないし、教室のなかではからかい気味の言葉にさえ「サー」をつける敬語表現が要求される。学校行事への強制的な参加や、生徒にも一目瞭然の教職員間の位階秩序……。すべては教職員の側の優位を宣言しているのである。そして最後に、希少なるがゆえに効果であると信じられている知識という商品の在庫管理を一手につかさどるもの、それが、地域社会に「文化センター」が登場している今日でも、学校の教師たちであることは明らかである。教育において交換される知識の価値は、教育にとってはさしあたり外的な要因、つまり、社会的上昇移動を条件づける成績証明としての価値に起因するだけではない。知識の価値は、学校制度のなかで知識が演じる役割そのものによって保護されている。知識の提供は強者の側の専決事項なのだ。教師はあたかも自分の所有物のように教科書を配布する。そして、教科書を紛失し

たり損傷したりすると、貸家を傷つけられた家主のように激怒する。備品欄の鍵をもっているのも教師であり、図書の貸し出しを許可したり、机を割り当てたりするのも教師である。教師が教育課程を定め、討論の進行をリードし、授業を開始したり打ち切ったりする。」(一七一―一七二頁)

「儀礼」「強制」「位階秩序」そして、「交換」。これらの言葉は「権力」に結びつけられることによって、特定の型の「権力論」を再生産する。ただし、持って回ったいかめしい説明に比して、議論の根拠は、特定の人員の間に不均等な力関係が存在するというその一点だけである。そして、その一点を、あらゆる言葉を尽くして不当であると言いつのる。

ただし、少し加工してみると議論の正体は明らかになる。たとえば、「ホテル」について考えてみると良い。ホテルは建物も内装もその経営者の趣味でデザインされている。そこで客は自分の趣味を主張する機会がない。これは不均衡である。ホテルは料金を勝手に決めている。これも不均衡である。ホテルは朝食のメニューを勝手に決めている。客はあてがわれた朝食ビュッフェを食べるほかない。これも不均衡である。ホテルの客室のベッドの硬さもホテルが決めている。慣れないベッドで安眠できなかった客は、ホテルがベッドを介して振るう権力の横暴の犠牲者であり、ホテルの権力の前に完全に無力である。ただし、これらのことをもってホテルにはたらく「権力」の横暴を告発する人はいない点だけは異なっている。

11　一九三〇年代のイギリスに目を向けてみると、哲学者のバートランド・ラッセルは「教育と訓練」と題する小文で次のように書いていた。

「教育における自由の問題について、現在、三つの主な思想の流れがある。それは、一部分は教育の目的の相違から、また一部分は心理学説の相違から生まれて来たものである。それで、子供はどんなに悪くても、すっかり自由にしておけという人々もあるし、どんなに善い子供でも、或る権威にすっかり従わすべきだという人々もあるし、また子供は自由にしておくべきだが、自由放任しておいても、常に善であるはずだという人々がある。この最後の一派は理論上当然そうであるべきものより、度はずれたことをいっている。大人もそうであるが、子供はすべて自由にしておくなら、道徳にそむくようになろう。……」(バートランド・ラッセル『怠惰への讃歌』、堀秀彦・柿村峻訳、平凡社ライブラリー、二〇〇九年、二二三―二二四頁)

『ハマータウンの野郎ども』の議論のあとでは、ずいぶんと抽象的な話をしているように思われるだろう。休日の学校に窃盗に入って備品を失敬する「野郎ども」に、「自由」を与えるべきか否か。授業を妨害するのは「自由」なのか。この種の問題を問うのは、浮き世離れしたことであると言われるのかもしれない。しかし、ラッセルの時代にもやはり「自由」という印象的な言葉をめぐって大勢の人々が議論していた様子は、おおよそ想像できるだろう。「教育」と「自由」、そして「道徳」。少し考えただけで目が回りそうなくらい循環し始める課題である。そもそも何が「自由」で「道徳」なのか、「教育」と何で、何が目的なのかという点が一致しなければ、ぐるぐる回って議論に出口はない。おそらくこの種の議論を盛んにする人々は、目が回るような循環を密かに愉しんでいるのではないだろうか。

もちろん、ラッセルは言語の問題にも大きな貢献をした哲学者なのだが、同時に「合理性」や「自由」といった古典的な哲学概念に忠誠心をもっていた最後の偉大な哲学者であったともいえる。有名な評論集『懐疑論』(一九二八年)では次のように書いているのが典型である。

「……政治家というものは党が大向こうを唸らせるような演説にならぬ意見には魅力を感じないのであって、普通の人間は、むしろ不幸を敵の陰謀のせいにする見解を選ぶのである。そんなことだから、ひとびとは、まったく直接関係のない政策のために闘ったり、それに激しく反対するのであるが、合理的な意見を持つ少数者は、誰の情熱をも満足させないという理由から、聞き入れられないのである。……」(ラッセル『懐疑論』、大竹勝訳、『ノーベル賞文学全集22』、主婦の友社一九七一年、二二頁)

「合理性」や「自由」という言葉を愛用するラッセルの議論で、しばしば登場するのは「普通の人間」である。対するのは、「合理的な意見

を持つ少数者」。もちろんラッセルは少数者の方なのだろう。

不合理な熱狂に身を任せて荒れ狂う大衆と、合理性を守り通そうとする少数の知識人。「知識人ラッセル」が大活躍した二十世紀への郷愁を誘う設定である。それならば、知識人はいつも合理的で、無謬なのか。こう問うと、すでに二十世紀は遠くなっている。知性を持った人々が合理的に計画すれば社会の問題は解決する、多少失敗しても改良して徐々に進んでいけば公正な社会が実現できる、ラッセルの思考の根元にはこうした発想があった。

ラッセルのような知識人が愛用する「合理性」や「自由」という言葉が単なる言説であった場合、状況は複雑になる。少し昔の「知識人」が熱心に信奉していた社会正義が、実は悪夢だった場合、その責任は誰がとるのか。時は流れ、種々のメディアを賑わした争いが飽和状態になり、決まり文句の羅列による思考の代用品が飽きられた後、ラッセルが若かった時代（一九二〇―三〇年代）よりも議論がたいして蓄積されていないことに気づかされるのである。